

「くしま」への取材を基に 原発事故後に放置されて餓死 のはまだ早いと言われるかも短編だ。「現実を題材に していった動物たちの思いに しがれないが、心がざわざわ動

「抜本的な改革」の病理

評者 阿部公彦

(東大准教授)

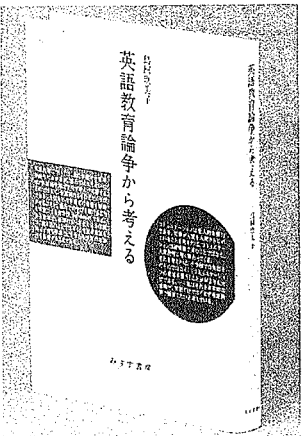
40年ほど前に起きた「英語教育大論争」を「存じだろつか。発端は当時の参院議員平泉渉による提言だった。「学校を出てもろくに英語が使えないのは困る。高校教育や大学入試から英語を外し、代わりに志願者のみに徹底した特訓をせよ」などと大胆な改革を呼び掛けたのである。この通称「平泉試案」に対し上智大教授(当時)の渡部昇一は徹底的に反論、「諸君、」誌上で応酬が続いた。世間でも大きな関心を集めた「事件」だった。

この後、英語教育は会話重視の「実用英語」へ大きく舵を切るが、背景には論争で「実用か、教養か」が対立点として注目されたことがある。

しかし、本当にそれは争点だったのか。本書は、平泉・渡部両氏のほか、周辺の人物への丁寧な取材を通じ、議論の本質についての誤解や無理解を明らかにする。実は両氏

著 鳥飼玖美子

英語教育論争から考える



の立場は「読み書き」を重視する点で、意外なほど近かったのだ。

著者は同時通訳としても活躍した英語教育の専門家。語学的な面の洞察も深い。オーラルヒストリーの手法を意識した、論争の再構成には、渦中の人物の人間臭を感じさせるノンフィクションの味わいもある。

明治期以来、英語教育をめぐる同じような「論争」は倦むことなく繰り返されてきた。「英語教育大論争」の検証が必要なもの、そうした抜本的改革症候群の病理を知るためである。

英語学習の困難は、しばしば安易な改革の希求につながる。訳読・文法教育の敵視、近年の「英語の授業は英語で」の掲唱、TOEFL導入プラン…。行政もメディアも世論も分かりやすい看板を求めがちだが、そうした潮流を見渡す著者の冷静な批判は傾聴に値する。

「グローバルな人材」を求める声が多い一方、英語学習の真の目的が人間同士の関係構築にあるという点は、依然として十分に理解されているとは言えない。本書の最終的な問いもそこに向かうのである。

(みすず書房・291
6円)